

「和歌表現にみる生活空間－奈良盆地を中心に－」

上野 誠*

文学部国文学科

『万葉集』の時代は、飛鳥・藤原・奈良に宮都が存在した時代である。したがって、その主な担い手は、律令官人であり、宮都生活者であった。本研究は、古代宮都生活者の文芸として『万葉集』を位置付けるときに、いったいどのような問題が想定できるのかということを考究した予備的研究である。

この予備的研究のための資料収集を、2000年の夏までに行なった。なお、資料収集の成果の一部は、上野誠著『万葉びとの生活空間－歌・庭園・暮らし－』（塙書房、2000年）の参考文献にも活かされている。

本研究の資料収集においてもっとも留意したのは、国文学はもとより、歴史学、民俗学、考古学・歴史地理学などの関連領域の新しい資料を網羅的に収集することであった。上記の図書文献目録にも活かされた収集資料は約150点近くあり、一定の成果を上げることができた、といえるだろう。

2000年秋からは、収集資料を軸として、予備的考察を行なうことができた。この予備的考察において、下記のような分析の観点を得ることができたと、思う。

- ① 都にある京内の邸宅と、京外の農園との往来が、さまざまなかたちで行なわれており、なかには書簡のやり取りも行なわれている。これを仮に宅庄往来の文芸と名づけることができるであろう。
- ② 『万葉集』では、大伴家持の庄経営と家族の移動を、天平11年の秋を中心にして知ることができる。対して、長屋王木簡では、持人と呼ばれる宅庄の往来者がいることが判明した。
- ③ 上記の資料を重ね合わせることによって、奈良時代における文芸のネットワークを明らかにできる、と思量するにいたった。
- ④ 邸内の庭園の発掘資料を使いながら、古代における庭園の文芸の実態を明らかにすることが可能になってきた。これは、今後の古代文学の研究に、大きな進展をもたらす可能性がある、と思量するにいたった。

以上の4点のうち、④の視点を発展させたものとして、万葉貴族の庭園に対する考え方を考察する論考を、下記の論集に発表することができた。下記の論文は、生活空間のうち庭を取り上げて、庭に対する意識を大伴家持の挽歌によって明らかにした論考で、ことに天平期の庭園文化と、貴族文学の関わりについて、詳細に論じたつもりである。当該論文では個人の趣味が反映される新しいタイプの庭園の誕生を、家持の弟である大伴書持に対する挽歌から明らかにした。なお、美夫君志会は、日本を代表する古代文学の研究団体で、日本学術会議登録団体である（本部・中京大学、代表理事・村瀬憲夫近畿大学教授）。

〔単著〕

論文名：大伴書持挽歌の説明的自注－萩の花にはへる屋戸を－
論文掲載誌：美夫君志会編「美夫君志論攷」
掲載誌発行者：おうふう
出版年：2001年9月15日発行
頁：188頁～202頁
種別：単行本所収論文